第 69 回日本小児保健協会学術集会　シンポジウム 4

いのちの授業

NICU 命の授業：未来への種まき

豊島勝昭（神奈川県立こども医療センター新生児科）

【いのちの授業を始めた契機】

2008 年から 2021 年の 14 年間に神奈川県内の小中高校において 72 回の「いのちの授業」を担当した（図 1）。授業を始めた当時は，全国的な慢性的な新生児集中治療室（NICU）病床の不足や周産期医療に従事する産科医・小児科医の不足が社会的課題として顕在化し，「周産期医療崩壊」を危惧する報道が連日されていた。出生数の多い神奈川県においても，切迫早産などの周産期救急妊婦の県外搬送が年間 100 件を超えていて，NICU 診療に従事するだけでは救えない命があると実感していた[1,2]。新生児医療と地域社会をつないでくれる NICU に入院経験のある患者家族と共に周産期医療の現状や課題を率直に地域社会に伝えたいと考えた。

2007 年に元プロ野球選手の村田修一氏をはじめとした当院 NICU 退院家族とともに NICU サポートプロジェクトの活動を始めた[3]。2008 年に「頑張れ！NICU 応援シンポジウム」という講演会を横浜市内のデパート併設の大会場で開催したが，関係者以外の参加者は少なく，地域社会における周産期医療への関心は高くないと実感した。周産期医療への関心を高めていくためには継続した活動が必要と考え，その一環として「NICU 命の授業」を開催することにした[4~6]。神奈川大学附属中学校で超低出生体重児や重症新生児仮死児のご家族と新生児科医で，写真を掲示しながら対話形式で当時の状況や気持ちを語り伝える 2 回の授業試験的に開催した。NICU で新生児の命を一緒に見守った患者家族と医療者の言葉だからこそ，生徒が＜いのち＞を考えるきっかけになれると実感し，他校での開催を目指した。日々の診療と併行して地域の学校での授業を行う困難さを危惧されたが，忙しい中でも忙し過ぎない未来を創るために取り組みたかった。授業の予定や内容を学校と事前調整する必要があるが，医療従事者で神奈川大学附属中学校の授業に参加した生徒の母がボランティアコーディネーターとして，県内のさまざまな学校に授業を提案・調整してくれた[5]。NICU 退院家族でもある学校関係者がいる学校，県内出身の医療者の母校で「NICU 命の授業」を継続的に開催した。毎年特定の学年に授業している学校もあれば，3 年毎に全校生徒に授業している中学校もある。中学生以上に授業することが多いが，小学校でも依頼があれば担当した（図 2）。授業時間は質疑応答を含め 60-90 分間で行ってきた。

【NICU 命の授業の内容】

生徒たちは見たことのない場所を想像することは難しい。事前学習として周産期医療に関する報道の記事や動画などを活用して関心を高める工夫を学校関係者と行っている。

2015 年以降は医療監修として関わっていた周産期医療に関するテレビドラマ「コウノドリ」を事前学習として活用する学校もある。事前授業の内容は各学校に委ねている。

授業の冒頭で「コウノドリ」の切迫早産の緊急入院

Presented by Medical*Online

図１　中学２年生への授業の様子

図２　小学４年生への授業の様子

のシーンを視聴してもらい，「お腹の中の赤ちゃんが死んでしまうかも，命が助かっても障害と共に生きることになるかもしれない」という病状説明やNICUでの家族の初対面の場面を上映している。その上で，「障害とは何か？」を生徒同士で話しあってもらっている。ドラマ視聴は導入には有効であるが，現実感を持ちづらい。「ドラマや映画でなく，この街で今も同じように頑張っている人達がいる」ということを実際のNICUの写真や動画で交えて，現実感を持ってもらうことを目指して授業している。

＜いのちの授業＞は，病気や治療を説明することではないと考える。周産期医療や小児医療の日常は＜いのちと向き合うこと＞であり，普段の診療や面会の様子，入院ご家族と話し合っていることを伝えれば，子どもたちなりに命について考える機会になりうる。早産・低出生体重児，先天性疾患，染色体異常，新生児仮死などで出生した新生児の入院から退院，退院後の様子を写真や動画で振り返りながら，新生児を見守る両親・兄姉・医療者などの言葉を伝え，感想を問いかけながら授業している。生存退院だけでなく，死亡退院となる新生児とご家族についても伝えている。

図３　授業で使用しているスライド

疾患や障害，医療的ケアの知識を提供するのではなく，さまざまな事情と共に生きる子どもたちの成長，ご家族の想い，生活における障害感を我が身に置き換えつつ想像する機会を提供することを目指している。

NICUで毎月誕生日を祝っているさまざまな疾患のご家族と医療者の様子を伝えている（図３）。不安に向き合いながらも日々を大切に濃密な時間を笑顔を忘れず過ごしている人達がいることを伝えている。

「長生きは高い山と似ているかもしれない。誰もが高い山の頂上に行きたいし，頂上からの景色を眺めたいように，誰もが長生き出来るならお互いに長生きしたいと願っている。でも，高い山（長生き）を願いすぎて，頂上に行かなくても見られる素敵な景色や足元の花（日々を生きる喜び）に気づけなかったり，踏みにじるような医療にならないようにしたい」という想いを生徒に伝えている。

また，「障害」とは病気や後遺症の重症度とは必ずしも一致せず，社会の中で子ども達自身や家族が＜生きづらさ＞や＜孤独＞を感じることと思えることを話している。医療者は＜生きづらさ＞を生活の中で感じることが少なくなるようにNICUで合併症を防ぐための集中治療を懸命にしている。しかし，病気や後遺症があっても障害感少なく生活している子ども達や家族もいる。病気やさまざまな医療的ケアが＜障害＞ではなく，そのことに理解や想像が乏しい人たちと医療現場や地域で出会うことが小児医療と共に生きる子ども達と家族の＜障害＞に感じられていることがある。応援しているつもりの医療者，学校関係者，周囲の人

Presented by Medical*Online

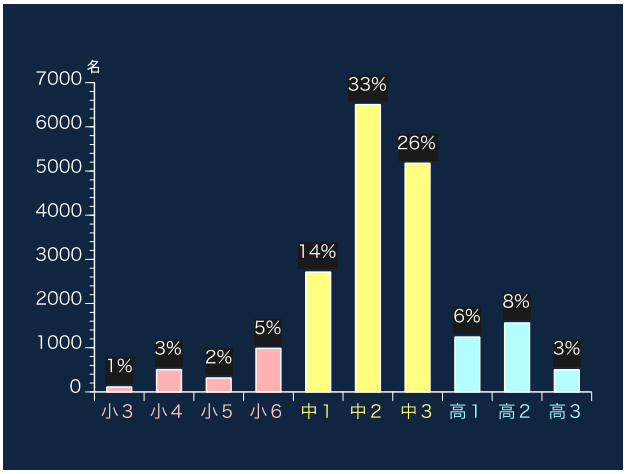

図 4　「NICU 命の授業」の学年別参加数

たちであっても，誰もが誰かの＜障害＞になっているかもしれないと伝えている。遠くを見るために眼鏡をかけるように，楽に生活するために栄養チューブ，補聴器，気管切開，車椅子，人工呼吸器などの医療的ケアと共に生きている子どもたちがいる。身体に障害がなくとも，集団生活の中で＜生きづらさ＞を感じている子どもたちもいる。眼鏡と同じように，それぞれの＜個性，特性＞と考えて，それぞれの＜生きづらさ＞に心寄せ，共に生きてくれる大人になってくれたら嬉しいという願いを伝え授業を終えている。

授業した学校に，NICU の患者家族や医療者が参加している場合には授業の最後に感想や経験を追加してもらっている。生徒により身近に感じる人たちの言葉は，生徒に自分事に感じられる効果がある。

【NICU 命の授業の効果】

2008 年から 14 年間で，40 校において計 72 回，小学 3 年生から高校 3 年生の 20012 人に授業した（図 4）。

中高一貫校で 6 学年合同で授業をした際に満足度調査を行った[5]。授業前は 7 割以上が「NICU を知らない」と回答していた。授業後の感想は「興味深かった」は中 1：65%，高 3：74%，「つまらなかった」は中 1：9% 高 3：3% であった[5]。

感想を大別すると，＜無事に誕生，成長＞が当り前ではないという気づき，自分の生命を大切にして生きていきたいという想い，自分に関わる人たちへの感謝，他者の命の労り，いじめはよくないという想い，障害とともに生きる人達への理解，自分が出来ることをしたいという気持ちの芽生えなどに大別された[5]。「命は大切」，「いじめはよくない」などを言葉にすると思考停止になると考え，授業では直説的に言及しないが，授業後にそのような感想を伝えてくれる生徒は多い。最も印象に残っている中学生の感想は「NICU にいる赤ちゃんやご家族をかわいそうと思うのは違うと気づいた。赤ちゃん達の頑張りとご家族の力強さを見習うべき自分たちだと思った，そして，今は元気な自分たちだからこそ，そういうことに感謝しつつ，自分たちが一緒に出来ることが何かを考えていきたい」であった。生徒の感想からむしろ授業をする自分が命を考える機会をもらい続けている。

「医者になって病気の人を救いたい」，「NICU 看護師になって，病気と闘う人を助けたい」，「医療者になりたいけど，どうしたらいいですか？」などの質問は多い。授業がきっかけで医療者を目指し，挫けず勉強できたと伝えてくれる医学生・看護学生・医療者が増えつつある[7]。医療職を目指す高校生のための小児病院 1 日見学なども開催するようになった[8]。

「いのちの授業」は医療者を目指すきっかけになりうると実感している。医療者にならずとも，身近な周産期医療や小児医療を知る機会は，地域の未来で父母になる可能性がある生徒達に意義は大きいと考える。

授業を通じて教育現場と小児医療の連携が向上しうる。生徒への授業後に，校長会・教員研修会などでの講演依頼が増えている。小児医療で救った命の先を支援してくれる学校関係者との交流から＜教育を支える医療＞を考えたいと願うようになった。進学校，公立校，特別支援学校，単位制総合高校などで授業をしている。それぞれの場所で NICU 卒業生との再会もあり，学校生活を知る機会になり，新生児医療や小児医療の役割や課題を知る機会になる。

学校は，地域における要の場所であり，社会への窓でもある。授業を聞いた生徒の各家庭での感想から養育者が関心を持ち，地域でのさまざまな場所での講演の依頼がある。小児医療患者に限らず，誰もがいずれは病気や障害と向き合って生きていくことになる。そういうことを応援しあえる地域の相互理解のきっかけになれたらと考えて，医療者の出来る地域貢献としてさまざまな場所で講演している。

新型コロナウイルス感染症の流行で授業の中止が続く頃，授業を共に開催してきた支援者と共に「NICU 命の授業～小さな命を見守る最前線の現場から～」を出版した。授業で何を話しているかの内容よりも，聞いた生徒達が＜何を感じたか＞が大切と考え，教員や

Presented by Medical*Online

授業を聞いて医療者を志望した生徒の感想を多く掲載した[7]。新生児医療関係者で連携して，千葉・岐阜・愛知・静岡などでもNICU学校プロジェクトは開催している。地元に密着している全国の周産期施設の役目の1つになれば，さらなる全国展開も可能と考える。

【おわりに】

＜NICU命の授業＞は，未来の父母に周産期・小児医療の認知，未来の医療者の志望，学校関係者と相互理解と連携，地域の医療応援の増加などの契機になりうる。

小児の成長や家族を見守る小児保健に関わる支援者ならばそれぞれの視点で「いのちの授業」が出来ると考え，＜未来への種まき＞として今後ともそれぞれに考えていきたい。

【文献】

1）豊島勝昭：病と共に生きる子どもたちと家族に向き合う　指定発言　NICU（新生児集中治療室）で病と共に生きる子ども達と家族に向き合う. 臨床死生学 2009；13：23-27

2）豊島勝昭：新生児医療の最前線　神奈川県職員提案事業「新生児医療の崩壊の阻止をめざした短期有給研修医制度」の創設．Neonatal Care 2009；22：317-322

3）豊島勝昭：こども医療センターNICUの現状と未来を考える．こども医療センター医学誌 2013；42：67-71

4）豊島勝昭，楢村哲生，友滝清一，他：神奈川県における「NICUのいのちの授業」の活動報告．日本周産期・新生児医学会雑誌 2016；52：601

5）菊地真実：赤ちゃんのいのちを通して「生きる意味」を考える　NICU学校プロジェクト「いのちの授業」5年間の活動. 日本臨床死生学会プログラム・抄録集 2013；19回：71

6）豊島勝昭：【新生児研修再考―新生児科医を増やすための取り組み―】全国各地の101名のNICU研修支援から新生児科医育成の今後を考える．日本新生児成育医学会雑誌 2022；34：145-148

7）豊島勝昭：命の授業を受けた学生たちの進路．NICU命の授業：小さな命を守る最前線の現場から 2020；赤ちゃんとママ社（東京）：pp.101-132

8）田上幸治，豊島勝昭，竹村　昭：医師を目指す高校生のための病院体験．こども医療センター医学誌 2015；44：3-5

いのちの教育～手作り教材を中心に～

川邉恵美子（はな助産院）

この度2022年6月25日の第69回日本小児保健協会学術集会第2日目におきまして，私が長年従事してきました「いのちの教育」について，シンポジストとしてお話させていただくという有難い機会を得ました。

そこで，当日の説明内容につきまして以下の通り説明します。

1.「いのちの教育」を始めたきっかけ

「いのちの教育」を始めたきっかけは，2003年に保健センターより思春期セミナーの依頼を受けたことです。その対象は，小学2年生で生活科「大きくなった私たち」（現在は「自分はっけん」）の単元でした。

助産学生の時，性教育をしたいという仲間がいて，すごいなと思っていました。自分自身は，子どもの成長と共に性教育に関わっていけるといいなと思っていたところ，まだ自分の子どもが2歳であり，小学校2年生の児童にどのように伝えたらいいのか3か月ほど模索を続けました。

2. 子どもたちへの伝達方法

学校の生活科の「自分はっけん」では，家族へのインタビューなどを通じて生まれてから今までの成長やできるようになったことを，子どもたちが自分でまとめて発表をするような授業をしています。

その授業の中で，助産師として生まれる前の話・生まれる時のこと・生まれてからのことを伝えています。専門用語は避け，言葉だけでは伝わりにくいことは感覚的な教材を工夫し，「体験」を中心として指導案を考えました。

3. 大切にしていること

まず，私が大切にしていることは，子どもたちと呼吸を合わせることです。先生からのご紹介の後，そわそわしていたり他のことが気になったりする子どもの目線を，まず，こちらに向けてもらってから話し始めるようにしています。一方的な話にならないように気を付けながら発問して，自分で考えられるように間を置き，こころに響くようにゆっくりと語りかけるようにしていきます。

そして，自分の経験や体験を自分の言葉で子どもた

Presented by Medical*Online